

## 『その名はインマヌエル』 (要旨)

## 聖書箇所：マタイの福音書1章18節～25節

本日から降臨節（アドベント）を迎えます。アドベントは、「すべての人を照らすそのまことの光」（ヨハネ1:9）としてお生まれになったイエス様のお誕生を待ち望む期間です。主イエス様の「まことの光」が、今日のあなたの心を照らし、そして輝かせてくださいますように。

## 【1】 思い巡らすヨセフ

ヨセフは妻マリアとの離別を決心しました<sup>1</sup>。マリアが妊娠したことを知ったからです。マリアは自分が聖霊によって身ごもったと受け入れていましたが、ヨセフはそれを理解していませんでした(参照: 路 1:26-38)。マリアの不貞と捉えたのです。ヨセフは「正しい人」（マタイ 1:19）で、律法の基準からマリアと一緒にすることはできないと判断しました。しかし同時にマリアを愛していましたので、彼女がさらし者になることを防ぐため、ひそかに離縁しようと思いましたが（19）。ヨセフは最善の判断ができるよう努めました。その後も「思い巡らしていた」（20）とあります。それは自分の判断に確信が持てなかったからなのでしょう。

## 【2】 ヨセフを決断に導いたのは…

さて、悩みに悩んで眠りについたヨセフに「主の使い」が現れました(1:20)。主の使いはヨセフの判断とは異なり、マリアを妻として迎えるよう励ましました(1:20)。ヨセフは夢から覚めたときに「主の使いが命じられたとおりに」（1:24）しました。マリアを妻として迎えたのです。彼がそのようにしたのは出産に関わる正確な情報とその意義を知ったからです。主の使いは、マリアが身ごもったのは不貞ではなく聖霊によるものだと言いました(1:20)。そして、マリアが産む男の子は約束された救い主キリストだと説明しました(21)。これらはヨセフがマリアを妻として迎える決断をするために必要な情報でした。しかし同時に、この決断は彼が思い描いた家庭を築くことを手放すことに他なりませんでした。「ヨセフは…自分の妻を迎え入れたが、子を産むまでは彼女を知ることはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた。」

## (1:24-25)

ヨセフと同時代に、正しい情報を聞いてもそれを受け入れることを拒絶した人物もいました(2:16)。何が違ったのでしょうか。ヨセフの神様に対する信頼と献身がなければ、このような決断をすることはなかったでしょう。

## 【3】 その名はインマヌエル

こうしたヨセフの決断は周囲の理解を得ることが難しいものでした。前途多難の門出と言えるでしょう。しかし彼は以下の約束を誰よりも先に自分のものとしたのです。「『見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』それは、訳すと『神が私たちとともにおられる』という意味である。」(1:23) かつて預言者イザヤが預言した救い主誕生の約束です。

ヨセフは人知れず悩み、苦しみました。しかしそんなヨセフの所に神様が御使を通して介入してくださり、「神が私たちとともにおられる」ことを明らかにしてくださったのです。ヨセフにとってマリアを迎え入れることは離縁する以上に困難が伴うものであったと容易に想像できます。しかし主の使いから知らせを聞いた後の彼の行動には迷いが見られません(参照:1:24-25, 2:21)。神様の約束を理解し受け入れ自分のものとしたからでありましょう。

ヨセフのように「正しい人」であっても、自分ではどうすることもできない課題にぶつかり、思い悩みます。私たちはそうした課題に直面しているのでしょうか？神様は私たちのために「インマヌエル」を送ってくださったのです。

▷今日のあなたが、みことばを通してインマヌエルと呼ばれるイエス様と出会い、平安と慰め、そして励ましを受け取ることができるよう。



<sup>1</sup> 当時の婚約は結婚と同じような重みがありました。婚約者同士は結婚まで生活を共にすることはありませんでしたが、婚約した者はすでに夫婦とみなされていました。